

「はずみに」と「はずみで」の比較

安 祥希

要 旨

本稿では、従来、構造的にも意味的にも同様のものとして扱われてきた「はずみに」と「はずみで」を分析し、両者が異なる構造・意味を持つことを主張した。

「はずみに」は、出来事を表す文相当の形式を承ける複合接続助詞と捉えられる。一方、「はずみで」は、「名詞(はずみ)+デ格」であり、文中に自立的に生起し得る。

このように異なる構造をなす「はずみに」と「はずみで」は、意味解釈にも違いが見られる。「はずみに」は、出来事間の時間関係を示し、「はずみで」は、原因と様態の解釈を有する。

キーワード

「はずみに」 「はずみで」 複合辞 格助詞

1 はじめに

「はずみに」と「はずみで」は、動詞「はずむ(弾む)」の連用形の名詞化¹である「はずみ」に、それぞれ「に」と「で」が後接したものである。両者は、先行研究では、ほとんど同じものとして扱われている(グループ・ジャマシイ1998、田中2010、松木2011、村木2012等²)。以下、用例を示す³。

- (1) だがそのとき長正は全身の緊張が弛んだ {弾みに／弾みで} 重大な落とし物をしたことに気がつかなかった。 『B：西郷斬首剣2004』
- (2) そして、口をひらいた {はずみに／はずみで}、くわえていた棒きれをはなしたものですから、カメはまっさかさまに地面に落ちて、からだがまっぶたつにわれで_マしまいました。 『B：ジャータカ物語1987』
- (3) ぶつかった {弾みで／弾みに}、ホットドッグを相手の胸に押しつけてしまったことに気付いた瑛は慌てた。 『B：恋の紳士協定2002』
- (4) 激しく振った {弾みで／弾みに} イヤリングは外れ、振っている途中から腕が筋

¹ 『日本国語大辞典』による。

² 田中(2010)は、「はずみに」「はずみで」が同じ構造を持つものとしながらも、意味的な差について言及している。詳細は4節で述べる。

³ 交替を示す場合は、左側に実例を表示する。なお、実例の場合は出典を示し、出典が示されていないものは作例である。

肉痛のような状態になり、ついには立ち上がって振ることになりましたが、努力の甲斐あり！所さんに「ウマイ！！」と喜んでもらえる作品が完成しました～

『N：矢野っち・良ちゃんのおまけコーナー』

上記のように交替可能であることから「はずみに」と「はずみで」は一見、同じ構造・意味を有するものに見える。しかし、両者が必ず交替可能というわけではない。

(5) 包丁で自殺を図ろうとしていたところを止めようとした母親を、{はずみで／??はずみに} 刺したという。 『朝：2001年4月15日』

(6) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの{弾みで／??弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。

『朝：2006年6月25日』

(5)(6)は、「はずみに」と「はずみで」に何らかの違いが存在することを示している。

本稿は、「はずみに」と「はずみで」が異なる構造・意味を有するものであることを主張する。以下、2節では先行研究を概観し問題点を指摘する。3節では、2つの現象を挙げ、「はずみに」と「はずみで」を同様に扱うことが出来ないことを示す。そして4節で、意味解釈の違いについて考え、5節で、本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2 従来の研究の概観

グループ・ジャマシイ(1998)には、以下のような記述が見られる⁴。

○【はずみ】

[Nのはずみ で／に] [V-たはずみ で／に]

① ころんだはずみに足首を捻挫してしまった。

② 衝突のはずみで、乗客は車外に放り出された。

③ このあいだは、もののはずみで「二度とくるな」などと言ってしまったが、本当にそう思っているわけではない。

「ある動作の余勢で」という意味で、予想しないこと、意図しないことが起こることを表すのに使う。③の「もののはずみで」は慣用句的な表現。「[V-た拍子に]」と言いかえられることが多い。 (グループ・ジャマシイ1998：502)

グループ・ジャマシイ(1998)では、「Nのはずみに」は成立するとされているが、用例は挙がっていない。(7)のような実例は存在するものの、(8(=(6))と同じように、「は

⁴ 下線は筆者による。

ずみで」と比べると許容度が落ちる。

(7) 衝突の {??はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け
上げられた。 『朝：1998年10月31日』

(8) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの {弾みで
／??弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 (= (6))

詳細は3節で述べるが、「はずみに」は「Nの」に後接することが困難であると考えられる。

田中(2010)は、「はずみに・はずみで」を扱っている数少ない研究の1つであり、それらを、Xという行為の結果としてYが生じる意味を表す一種の発生表現とし、「はずみに」と「はずみで」における「に」と「で」を格助詞としている⁵。田中(2010:244)は、「格の性格からみれば、一般に「はずみに」のほうが「はずみで」よりも原因理由への傾斜があり、「はずみで」の場合は限定的ではなく、偶然性を強調した言い方になる。これは二格とデ格の深層的な意味特徴が背後にあるとみられる」と述べているが、「に」と「で」を格助詞と見ることの根拠については言及がない。

松木(2011)は、「はずみに・はずみで」を、連用節を構成する名詞派生の複合辞的表現とし、時を表す語としている。松木(2011)は、主に、種々の複合辞表現をまとめたものであり、個々の詳細については論じていないが、時を表す語であるとする点は、後述する村木(2012)、藤田(2015)と一致する。

村木(2012)は、時を表す従属接続詞の中で「はずみに・はずみで」を扱っており、両者の共通した意味として、「ある事態が成立する<直後>に、それが<きっかけ>となって、別の事態が起こることを予告する(p.336)」こととしている。また、品詞性について「はずみ」は、名詞、副詞、後置詞、従属接続詞としての用法を有し、そのうち副詞、後置詞、従属接続詞においては「はずみに」と「はずみで」の双方の語形があるとすが、「はずみに」と「はずみで」は同じものとして扱っている。

しかし、既に述べたように、両者を同じものとして扱うことには問題がある。加えて、藤田(2015)も指摘するように、「はずみで」は、「はずみに」とは異なり、単独で文中に生起することが出来る。

(9) 記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、つい {はずみで／??はずみに}
夕食の約束をする。 『朝：1998年11月8日』

⁵ 田中(2010)は、「はずみに」「はずみで」を瞬間と同時を表す複合辞として取り上げているにもかかわらず、「はずみに」「はずみで」の「に」と「で」を格助詞と捉えている点は問題がある。

(10) 2年前、雑誌の取材を受け、{弾みで／??弾みに} 米国横断を宣言。

『朝：2010年4月22日』

村木(2012)は、「はずみで」がある事態が別の事態を生じさせるとしているが、(9)と(10)は、別の事態を生じさせるきっかけとなる事態が存在しない。一見、先行する従属節がきっかけとなる事態であるように見えるが、あくまでも別の節となっており、また、「その」で従属節を承けようとする不自然になることから、そのようには考えられない。

(11) ??記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、ついその {はずみで／はずみに} 夕食の約束をする。

(12) ??2年前、雑誌の取材を受け、その {弾みで／弾みに} 米国横断を宣言。

つまり、「はずみで」は必ずしもきっかけを表すわけではない。

藤田(2015)は、複合辞「拍子に」を主な分析対象としたものであるが、意味の比較のために「はずみで」も取り上げている⁶。藤田(2015)は、「はずみ」は、まだ実質名詞であると見るべきものとし、以下のように「ちょっとした」のような規模を表す修飾句を加えても成立することを論証として挙げている。

(13) ちょっとした{*拍子に／はずみで}、怪我をした。 (藤田2015：71)

「はずみ」に「力・作用で」といった意味を読み取って解するのが自然であり、実体的な意味が読み取れることから「はずみで」を複合辞と捉えるべきではないとする。さらに、「彼ははずみで転んだ」のように、何も承けずに現れることも「はずみで」が辞化していない証拠であるとしている。これと関連して、「はずみに」については何も承けずに現れることはないため、辞化の進んだものと捉えられる可能性を指摘している。「はずみに」が何も承けずに現れないことに関しては、既に(9)と(10)で確認した通りである。

「はずみで」を複合辞と捉えることは妥当でないとする藤田(2015)には同意するが、本稿は、これを辞の問題ではなく、複合の問題として捉える。これについては、藤田(2015)とは異なる証拠を挙げて「はずみに」と「はずみで」の違いをより具体的に示す。

これまでの研究は、「はずみ」＋「に／で」を次の2つのいずれかで捉えようとして

⁶ 藤田(2015)は、「はずみに」の存在を認めつつも「はずみで」だけを対象とするとし、「「はずみで」「はずみに」の両形が考えられるが、実際の用例としては、「はずみで」が圧倒的に多いので、以下この稿では「はずみで」の形について考えることにしたい。「はずみで」と「はずみに」では、微妙な違いがあるのかもしれないが、(後略)(p.61)」と記す。

おり、これについては本稿も同意する。

① 名詞(はずみ)+格助詞

② 複合辞

①と②の組み合わせの可能性と、先行研究の「はずみに」「はずみで」それぞれの位置付けは以下のようにまとめられる。

表1 先行研究のまとめ

	「はずみに」	「はずみで」	先行研究の立場
可能性1	①	①	田中(2010) ⁷
可能性2	①	②	
可能性3	②	①	藤田(2015)
可能性4	②	②	松木(2011)、村木(2012) ⁸

本稿は、「はずみに」は接続助詞として一語化が進んだもの、「はずみで」は「名詞+格助詞」と捉え、「はずみに」と「はずみで」を可能性3のように位置付けられると考える。この詳細は次節で検討する。

3 「はずみに」と「はずみで」の文法的機能から見た内部構造

ここでは、2節でまとめたものを踏まえ、2つの現象を挙げて「はずみに」と「はずみで」が異なる構造を有していることを示す。

3.1 「Nの {はずみに／はずみで}」

田中(2010)は、「はずみに」も「はずみで」も「名詞(はずみ)+格助詞」であるとしているが、グループ・ジャマシイ(1998)を検討した際に指摘した通り、「Nのはずみに」は「Nのはずみで」より許容度が落ちる。

- (14) つぶさないようにと両手で大事に包んでいたが、バスの急ブレーキの {弾みで／??弾みに}赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 (= (6))
- (15) 衝突の {??はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 (= (7))
- (16) 事故の {弾みで／??弾みに}、黒坂さんの軽乗用車が前方左側の歩道に突っ込み、自転車に乗って信号待ちをしていた同市新和5丁目、主婦加藤幸子さん(39)をはねた。 『朝：2002年1月12日』

⁷ 注5を参照されたい。

⁸ 村木(2012)は「従属接続詞」と呼んでいる。

- (17) 町中さんらは、転落の {はずみで／??はずみに} 車外に投げ出されたとみられる。 『朝：1985年7月12日』
- (18) 経営不振の {??はずみに／はずみで} 株が暴落した。

田中(2010)が言うように、「はずみに」と「はずみで」の「はずみ」がともに名詞であるなら、どちらも「の」による連体修飾を許容するはずであるが、上で見たように実際はそうではない。これは「はずみで」の「はずみ」に比べ、「はずみに」の「はずみ」が名詞性を喪失していることを示す。

なお、「はずみに」が「の」による連体修飾を承けられないのが「はずみ」とNとの意味関係の問題ではなく、名詞性の低さによるものであることは、以下のように「はずみに」が(14)~(18)に示したものと同一意味を表す節を承けることが出来る点からも確認出来る。

- (19) バスが急ブレーキをかけた {弾みで／弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。
- (20) 衝突した {はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。
- (21) 事故を起こした {弾みで／弾みに} 車が歩道に突っ込み、主婦加藤幸子さん(39)をはねた。
- (22) 転落した {はずみに／はずみで} 車外に投げ出されたとみられる。
- (23) 経営が悪化した {はずみで／はずみに} 株が暴落した。

以上、「はずみに」はそれ単独では機能せず、出来事を表す文相当のものに後接することが求められ、また、「はずみに」の「はずみ」は、名詞の実質的意味を失っていると考えられる。

3.2 「ガ／ノ」交替

3.1節では、「はずみに」が「の」による連体修飾を許容しにくいという観察から、「はずみに」の「はずみ」が名詞性を喪失していると捉えられることを指摘した。しかし、(19)~(23)の「はずみに」が連体修飾節を承けているとしたら、「の」による連体修飾を許容しにくいという現象に対し、名詞性の喪失とは異なる説明を与えなくてはならなくなる。そこで、本節では、節を承ける「はずみに」について検討を加える。

連体修飾節内の主格名詞(句)は、「ガ／ノ」交替が許されることが指摘されている。

- (24) a. ここは飛行機 {が／の} 飛び立つところだ。
b. 今まさに飛行機 {が／*の} 飛び立つところだ。 (三宅2005：65)

三宅(2005)は、(24a)における「ところ」は名詞性を持っており、従って連体修飾節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ/ノ」交替を許すが、(24b)の「ところ」は、助動詞化に伴って名詞性を失っているため、主節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ」による標示しか許さないと述べている。

田中(2010)は「はずみに」と「はずみで」の「はずみ」を名詞とする。それならば両者の修飾部はともに「ガ/ノ」交替を許すことが予測されるが、以下のように「はずみに」は「ガ/ノ」交替を許さない。

- (25) a. 車 {が/の} 衝突したはずみで、車内の人々が投げ出された。
 b. 車 {が/*の} 衝突したはずみに、車内の人々が投げ出された。
- (26) a. 山積みの本 {が/の} 崩れたはずみで、探していたへそくりが出てきた。
 b. 山積みの本 {が/*の} 崩れたはずみに、探していたへそくりが出てきた。
- (27) a. 雷 {が/の} 落ちたはずみで、旅館の屋根が崩落した。
 b. 雷 {が/*の} 落ちたはずみに、旅館の屋根が崩落した。

「ガ/ノ」交替を許す「はずみで」は、連体修飾節を承けており、「名詞(はずみ)+デ格」という内部構造をなしていると言える。一方の「はずみに」は、「ガ/ノ」交替が不可能であるため、「はずみに」の前に来る節を連体修飾節と捉えることは出来ず、「はずみに」全体が1つの語として、それに前接する節と後に続く節の関係性を標示する要素、つまり、複合接続助詞として機能していると言える。

本節では、「Nの {はずみに/はずみで}」、「ガ/ノ」交替」という2つの現象を通して、「はずみに」は、「名詞(はずみ)+格助詞」ならば可能であるはずの振る舞いが出来ないことから、節と節を繋ぐ複合接続助詞と考えられることを示した。加えて、「はずみで」は、連体修飾節を作ることから、「名詞(はずみ)+デ格」で成り立っていることを確認した。

以上を根拠に、本稿は、「はずみに」と「はずみで」それぞれの位置付けは2節の表1における可能性3、つまり、「はずみに」は複合接続助詞、「はずみで」は「名詞(はずみ)+デ格」であると考えられる。

3節では、「はずみに」と「はずみで」の文法的機能及び内部構造の違いを示した。4節では、意味解釈の違いについて述べる。

4 「はずみに」と「はずみで」の意味解釈の違い

3節において、「はずみに」は複合接続助詞であるのに対し、「はずみで」は「名詞(はずみ)+デ格」であることを指摘した。ここでは、先行研究において、ともに時や原因・理由といった言葉で説明されている両者の意味解釈の違いについて考える。

先に見たように、村木(2012)は「はずみに・はずみで」について「ある事態が成立する<直後>に、それが<きっかけ>となって、別の事態が起こることを予告する(p.336)」としている。確かに、両者が置き換えられる場合は、ともにそのような意味を表すと捉えられる。

- (28) バスが急ブレーキをかけた {弾みで／弾みに} 赤ちゃんたちを車内にばらまいてしまった。 (=19)
- (29) 衝突した {はずみに／はずみで} 二人が海に投げ出されたが、ほかの部員に助け上げられた。 (=20)
- (30) 事故を起こした {弾みで／弾みに} 車が歩道に突っ込み、主婦加藤幸子さん(39)をはねた。 (=21)
- (31) 転落した {はずみに／はずみで} 車外に投げ出されるとみられる。 (=22)
- (32) 経営が悪化した {はずみで／はずみに} 株が暴落した。 (=23)

一方で、田中(2010)は、両者の意味に差があることを指摘している⁹⁾。田中(2010)は、「はずみに」は原因理由を、「はずみで」は偶然性を強調した言い方になると、ニュアンスの違いについて述べている。

村木(2012)の捉え方は、「はずみに」と「はずみで」が節と節を繋ぐもの、つまり、接続助詞として機能しているとする捉え方である。これは接続助詞である「はずみに」の説明にはなる。しかし、「はずみで」は3節で論じたように「名詞(はずみ)+デ格」であり、「はずみ」が承ける節は連体修飾節であるため、節と節を繋ぐ働きをしていると捉えることはできない。また、「はずみに」と「はずみで」に田中(2010)が指摘するようなニュアンスの差が存在するならば、それは両者の意味解釈に違いがあるためと捉えることができるはずである。

では、「はずみに」と「はずみで」の意味解釈には、どのような違いがあるのか。

まず、「はずみに」について考えてみる。例えば、以下のようなものは、「はずみに」が承ける節と主節の出来事との間に関連性の差が出る。

- (33) うまく席がえのできる女性は、最後は自分が一番いいと思える男性の隣に座れます。ダイレクトにそこへ行こうとしても、なかなか行けません。トイレ

⁹⁾ 村木(2012)は、「「はずみに」は<とき>の意味に限られるが、「はずみで」の形式の使用は、<とき>にくわえて、<原因>のニュアンスをそえている(p.313)」とし、違いがあるとしている反面、最後のまとめでは、「「はずみに／で」は、<とき>にくわえて、原因・理由にかかわることもある(p.337)」のように、「はずみに」と「はずみで」の共通の意味であるような書き方をしている。

¹⁰⁾ 藤田(2015)は、「はずみに」を扱ってはいないが、「はずみで」については原因を表すとしている。また、両者には「微妙な違いがあるかも知れない(p.61)」としているが、この「微妙な違い」が両者の構造や振る舞いの違いを指すのか、意味の違いを指すのか、それとも、その両方を指すのかについては言及が見られないため、明らかではない。

に立って人が抜けたはずみに、どんどん席をかえていくのは好感が持てます。

『B：ハッピーな女性の「恋愛力」2004』

- (34) ぼくの友人は、台所で昼寝していて、頭をぶつけた弾みに包丁が落ちてきたと発言。 『N：適応行動論』

(33)の「人が抜けた」ことが直接主節の出来事を引き起こしているわけではないため、これを原因・理由と見るのは難しい。一方、(34)の「頭をぶつけた」ことは「包丁が落ちてきた」ことを直接引き起こしており、(33)と比べ前件と後件が密接に関係している。このように、同じく「はずみに」が用いられた出来事同士を繋いでいる場合でも、前件と後件の関連性の度合いに違いが現れる。

本稿は、「はずみに」は出来事同士の時間関係を表すと考える。因果関係は時間関係を含意するが、時間の前後関係は必ずしも因果の意味を含まない。よって、(33)のような時間の前後関係しか持たないものが説明出来るとともに、(34)のような前件と後件の時間的な継起が因果関係と解釈されることがあることから、「はずみに」が原因・理由を表すことも説明出来る。これは、「トキニ、サイニ」等のような時の「ニ」と関係付けられる。「はずみに」は一語として機能しているが、時の「ニ」との関連は、「はずみに」の構成要素である「に」のもとの意味の反映であると捉えられよう。

次に、「はずみで」の「デ」は、(35)に示すような原因のデ格であると捉えられる。

- (35) 「お父さんは五年前に脳腫瘍で死んだの」 (間淵2000：16)

ところが、原因のデ格であると、以下のような単独で現れる場合の「はずみで」が説明出来ない。

- (36) 包丁で自殺を図ろうとしていたところを止めようとした母親を、はずみで刺したという。 (= (5)の改定)
- (37) 記憶に薄い近所の肉屋と旅行先で偶然出会って、ついはずみで夕食の約束をする。 (= (9)の改定)
- (38) 2年前、雑誌の取材を受け、弾みで米国横断を宣言。 (= (10)の改定)

(36)～(38)の「はずみで」は、「V-たはずみで」のように連体修飾を受けておらず、それ単独で機能しているが、このような場合、原因を表すとは解釈しにくい。このような「デ」は、「動詞の示す動作を行う動作主体の様態、行為を受ける対象の様態、作用・出来事それ自体の状態等を表す(間淵2000)」という点で、以下のような様態のデ格と捉えられる。

(39) その後すぐ、さっきのダンプ嬢が、「黒牛のような勢い」で、追った。

(間淵2000 : 16)

「はずみで」は表面上、「はずみに」のように出来事同士を繋ぐように見えるが、(36)~(38)のように単独で出現するものまでを視野に入れると、必ず、ある出来事をきっかけに別の出来事を生じさせるといった原因の解釈を持たないことが分かる。このような多様な解釈が生じるのは、デ格の担う多義性によるものである。

以上、「はずみに」と「はずみで」の意味解釈の違いについて検討した。まとめると、「はずみに」は時間関係を、「はずみで」は原因と様態の解釈を表す。

5 まとめ

本稿は、「はずみに」と「はずみで」を比較し、内部構造の違いと意味解釈の違いが見られることを確認した。簡略にまとめると以下のようなになる。

I 内部構造の違い

- i) 「はずみに」：複合辞(複合接続助詞)
- ii) 「はずみで」：名詞(はずみ)+デ格

II 意味解釈の違い

- i) 「はずみに」：時の解釈
- ii) 「はずみで」：原因、様態の解釈

また、本稿で扱った「はずみに」と関連する形式として「～をはずみに(して)」が挙げられる。

- (40) a. しかし、世界は米ソ超大国の接近を弾みに、カンボジアをめぐる中ソ、中ベトナム関係も、去年から今年にかけて急速に正常化もしくは雪解けの方向にある。 『朝：朝刊1989年2月17日』
- b. 世界は米ソ超大国の接近を弾みにして、カンボジアをめぐる中ソ、中ベトナム関係も、～正常化もしくは雪解けの方向にある。

村木(1983)は、 $\langle N_1 \text{ヲ} N_2 \text{ニ} \rangle$ 形式は、形式動詞「して」を補って従属句に出来る場合が多く、 N_2 は名詞性を失って後置詞的な性質を帯びているとする。村木(1983)は「はずみに」を扱っていないが、上記の形式と本稿で取り上げた「はずみに」をどのような関係で捉えられるのか、また、単に「して」を省略したものと見て良いのか等の問題が考えられる。これについては別稿に譲る。

参考文献

- グループ・ジャマシイ (1998)『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 田中寛 (2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房.
- 藤田保幸 (2015)「複合辞「～拍子に」について」『龍谷大学国際センター研究年報』2
4: 59-74,龍谷大学国際センター.
- 間淵洋子 (2000)「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51 (1): 15-31.
- 松木正恵 (2011)「接続関係を表示する複合辞的表現—名詞性接続成分のタイプから見た連体複文構文と連用複文構文の接点—」『NINJAL共同研究発表会・シンポジウム 平成23年度 (2011年度)「複文構文の意味の研究」ワークショップ資料』.
(https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/20111217-043re/20111218_matsuki.pdf)
- 三宅知宏 (2005)「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1 (3): 61-76.
- 村木新次郎 (1983)「「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実 (編)『副用語の研究』267-292,明治書院.
- (2012)『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房.

辞典

『日本国語大辞典 第二版』 (<http://japanknowledge.com>)

用例出典

B: KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』 国立国語研究所.

N:『NINJAL-LWP for TWC(NLT)』 筑波大学.

朝:『聞蔵ビジュアルII』 朝日新聞社.

(安祥希 筑波大学大学院生)

A Comparison of “*hazumi-ni*” and “*hazumi-de*”

AHN Sanghee

“*Hazumi-ni*” and “*hazumi-de*” are treated as compound particles in previous studies, but they are different structurally and semantically. In this paper I demonstrate how they differ in structures and semantics. The results are as follows.

I Difference in structures

“*Hazumi-ni*” takes a clause that indicates an event, and functions as compound conjunctive particles. On the other hand, “*hazumi-de*” consists of noun “*hazumi*” and case particle “*de*” analytically, and that can function as adverb by itself syntactically.

II Difference in semantic construal

“*Hazumi-ni*” expresses temporal relationship between two events. “*Hazumi-de*” expresses cause or manner.